

## 名前の標準化と民族の規模

国民国家は、様々な登録制度を通じて内部空間の均一化を促そうとする。身分証明書への個人名の登録は、その最も重要な柱の一つである。ただし、ケニアの国法はその登録方法を厳密に規定していない。したがって、行政の運用時の裁量の幅が大きく、民族や地域による異同は小さくない。その一端を、前回、西南ケニアの系統の異なる2つの民族であるキプシギスとイスハの比較を通じて概観した。今回は、この間の事情を更にもう少し立ち入って検討したい。

### ■名前の規格化

現在イスハでは、誰もが身分証明書に「クリスチャン名」と祖名、その後に父親の名前の3つを順に書き連ねる〔中林伸浩「名前と氏族」、上野和男・森謙二（編）『名前と社会』1999〕。しかし、キプシギスでは、このような定式は存在しない。最も普通には一男性の場合「クリスチャン名」、幼名、（尊称抜きの）本人の父称の3つを、この順番で登録する。女性の場合、この仕方では、父称の部分が未婚なら父親の父称、既婚なら夫の父称となる。

だが、「クリスチャン名」と幼名の順番を逆にする人も珍しくない。更に、幼名または「クリスチャン名」のどちらか一方を省いた、2つの名前だけを登録している人々もある。

ケニアの身分証明書制度は、英国植民地政府が始めたもので、ケニア人はスワヒリ語で *kipande* と呼び習わしてきた。政府は、アフリカの個人の各々が持っている数多くの名前を英語の personal (Christian) name、middle name、family name (surname) というカテゴリーに当てはめ、登録された公式の名前とそれ以外の名前に分類して整理を図ってきた。

キプシギスでは、「クリスチャン名」・幼名・

父称（成人名）が英語名のそれぞれのカテゴリーに対応する名前として選ばれた。だが、他のカレンジン諸民族と同様、キリスト教への改宗がなかなか進まず、多くの人々は幼名・父称の2つだけを登録した。また改宗者には、退嬰的だとして、伝統的な幼名を自発的に省く者もいた。その結果、初期には2つの名前を身分証明書に記載する者が多かった。つまり、登録の場では「クリスチャン名」と幼名は、独立したカテゴリーというよりも、同じカテゴリーの中で対抗する関係にあるものとして意識されたのだ。

### ■「姓」・「家族名」

アフリカの個人名を英語名に重ね合わせる事に大きな無理があったのは明らかだ。前回紹介した通り、現在のイスハでは、身分証明書に記載する第3番目の名前は、両親と子供たちに共通の名前を与える働きを持っている。だがこの名前は、世代を超えて受け継がれないし、夫が婚資を完納していない等の理由で、妻がそれを父親の名前から夫の名前に書き換えない場合がある。つまり、欧米の姓や家族名とは非常に違った性質のものなのである〔前掲書〕。

今日キプシギスでは、身分証明書の第3番目の名前を父称にするのは確立した慣行で、イスハの場合とほぼ同じ機能を持つといえる。ただし、一夫多妻婚なら、「妻の家」ごとに息子たちの父称を変える事が今でも珍しくない。

例えば、Kiplang'at arap Chumoに3人の妻があるとすると。成人した息子たちには、それぞれの「妻の家」別に arap Lang'at、arap Goske、arap Kirui という父称を与えるだろう。arap Lang'at という父称は身分証明書に登録した幼名 Kiplang'at に、また arap Goske は Kipgoske（「祖霊呼び儀礼の際に嚏で応答しなかった男

児)」という誕生の状況を記念するもう一つの幼名に由来する。arap Kiruiは、Kipkiruiという幼名から出ているが、これは彼の実際の幼名ではない。日没から深更生まれの男の子に、粥名(幼名)の一種である「誕生時間名」を与える場合、時間の経過に沿っておおまかに Kiplang'at、Kipkirui、Cheruiyotとする。そこで Kiplang'atの代用にKipkiruiを想定するのである。

父称を分ける慣行は、伝統的な信仰に由来する。つまり、直近の家族を初めとする氏族員の罪、或いは呪詛などの神秘的な力に起因する災いが総ての息子に及ぶ事を避ける、独特の工夫なのだ。だから、単婚の場合でさえもそうする事がある。植民地時代は、政府の徴用逃れや税金逃れも、その重要な目的だった。この事実からは、「お上」としての政府観が窺えよう。

#### ■サーネームって何？

中林によれば、イスハ人は祖名を俗に「サー・ネーム」という[前掲書]。この混乱も、アフリカの個人名の体系を英語のそれに重ね合わせる事の困難さを雄弁に物語っている。

キプシギスの人々は、イスハ人同様に身分証明書の導入時にサーネームが何であるかを理解できなかったし、実は今でも理解できていない。前節で、現在では身分証明書には「クリスチャン名」・幼名・父称の順に、例えば Joseph Kiplang'at Chumoと書き記すのが最も普通で、それに次いで Kiplang'at Joseph Chumoの形式を採る人が多いと述べた。この混乱も、サーネームの誤解に起因している。しかも、それは比較的最近、学校教師が広めたらしいのだ。

1998年以来私の調査を手伝ってくれている Wesley Cheruiyot arap Ruto (28歳)は、1988年の全国一斉小学校卒業資格試験(KCPE; Kenya Certificate of Primary Education)の際に、教師の指示通りにCheruiyot Wesley Rutoと記名した。ンダナイ小学校の担任教師は、Cheruiyotの類の伝統的な幼名がサーネームであり、それが真先に来る名前だと生徒たちに説明した。そして、名前を書き損ねる「失敗」を

するなと念を押した。Wesleyは、一旦そう決めた以上、便宜上以後もこの名前で通し、身分証明書用にも使った。

また、現在ンダナイ中学校(ほぼ日本の高校に当たる)の父兄雇いの教員をしている Collins Kibet arap Rotich (22歳)は、国立大学を卒業したこの地域では珍しいインテリだが、全く同じ理由から Kibet Collins Rotich を身分証明書上の名前としている。

彼らは今では、自分の身分証明書の名前が、新聞などに記載される、キプシギスやカレンジンの標準的な名前の配列と異なる事に気づいている。だが、手数料が200シリングかかる事もあって、改名して登録し直す積もりは少しもない。日常的にも不自由はないのだ。

#### ■律義な臨時役人

私がキプシギスの調査地に滞在していた1999年8月、ケニアでは10年振りの国勢調査が実施された。私にとっては、前々回、1979年8月に続く2度目の国勢調査の経験だった。

村の長老と連れ立って訪ねて来たのは、Elic arap Lang'atという顔見知りの30代の調査員だった。彼は緊張していた。質問を始める前に Kimutai Lang'atと名乗り、杓子定規な自己紹介と説明をした。

彼らが帰った後、居合わせた人々に、彼がなぜElicではなくKimutaiと名乗ったのかと尋ねた。彼は、KCPEの時にKimutai Lang'atの名前で登録した。その後でカソリック信徒となった。でも、全国一斉中学校卒業資格試験(KCSE; Kenya Certificate of Secondary Education)でも、また身分証明書にも元の名前を使う必要があった。今日は臨時に政府に雇われているので、身分証明書通りに名乗ったのさと、人々は笑った。

イスハとキプシギスの事情の違いには、人口規模の差が関係しているように思う。イスハは2つの郡を、キプシギスは3つの県を占める。イスハではともかくも名前の標準化が図られたが、キプシギスではまだそうではない。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)